



四
吟
歌
仙
〔
角
砂
糖
〕
の
巻

四
吟
歌
仙
〔
角
砂
糖
〕
の
巻

四
吟
歌
仙
〔
角
砂
糖
〕
の
巻

四
吟
歌
仙
〔
角
砂
糖
〕
の
巻

四吟歌仙〔角砂糖〕の巻

起首 二〇十三年五月十日

満尾 二〇十三年七月六日

校合 二〇十三年八月四日

発句 新緑やグラスにのせる角砂糖 泥酔

脇 よいの心地は初夏の暮れまち 罵角

第三 靴音の行き交う通り華やぎて 桂

四 テールランプをなぞる鳥の目 摩衆

五 月影も大笑ひして唐相撲 酔

折端 清かな波に帰還船揺れ 桂

初裏

折立 まれびとの食むオリーブの固き実に 衆

二 はなしの種を柳田が乞ふ 罵

三 曲り家の夜は枕を返されて 酔

四 締め切り前の日射し眩しく 桂

五 約束よクリスマスにはデイズニーへ 衆

六 園児の恋路みかん組へと 罵

七 畠ごとに菜の花たちもたけくらべ 酔

八 老視たのしむ朧なる月 衆

九 広^{ひろ}縁^{えん}を磨けば風も長^の閑^どけしく 酔

十 甘きかほりに膨らむ桜 罵

十一 変身はチェリーレッドのリップから 衆

折端 鏡に探す君のまなざし 桂

名残表

折立

濡らさじと引き寄せてみる若葉雨 酔

二

レビュー閉じても白夜の舞へり 罵

三

後朝きぬ きぬもさめるに青娥せい が ひげ髭のあと 衆

四

スパムメールでウィルス感染 桂

五

鞍馬よりマクロファージが出でまして 酔

六

毛皮に覆う賢者の理法 罵

七

あめゆじゆとてちてけんじやを思ひ 衆

八

固体ロケット旅路果てなく 桂

九

汀みぎわには自由の女神横たわり 酔

十

羅生門にぞ百舌鳥も ずの贅にえある 罵

十一

悠々と古都を包みて月明かり 桂

折端

檸檬れ もんを置きし悪戯いた ずらゆるす 衆

名残裏

折立 画布おもて静物はただ輝ける 罵

二 冬の雷雲pegasusは曳く 酔

三 高速を初荷トラック装いて 桂

四 あたたかき風立てば未来へ 衆

五 笛吹きは花の枢とほそにいきをのみ 罵

拳句 春爛漫に登る城跡 酔

拳句二 三賢者呼ぶ春の明星 衆

拳句三 海市に棲める蛤はまぐりになる 罵

拳句四 綿帽子舞う雲の楼閣 桂